□ 作　曲

石　塚　潤　一

2023年の作曲界には，あまり明るい話題がなかった。松平頼曉(1/9)，松本日之春（3/2)，丹波明（4/14)，坂本龍一（3/28)，外山雄三（7/11)，福島和夫（8/19)，西村朗（9/7)，下山一二三(12/16）が逝去し，海外からも，フリードリヒ・チェルハ（2/14)，カイヤ・サーリアホ（6/2)，クラレンス・バーロウ（6/29）らの訃報が届いた。中でも，その唐突さに多くの人々が衝撃を受けたのが，西村朗の訃報であったろう。70歳の誕生日を迎える前日の死去であり，近年の作曲家の長寿傾向，たとえば，ジェルジ・クルターグのように90歳過ぎて初めてのオペラをものにする作曲家がいることを考えれば，まだまだ働き盛りである。西村朗は，テレビや映画の音楽など，商業的な作曲をほとんど行っていないが，NHK Eテレ「N響アワー」の司会を2009年より３年間務めるなど，クラシックファン一般にも広くその顔を知られ，東京音楽大学の作曲科教授から，日本音楽コンクール委員長，草津夏期国際音楽祭の音楽監督といった，現代音楽の世界に留まらない，クラシック音楽界の数々の要職をつとめてもいた。2022年の一柳慧の死没が，一作曲家の死没であると同時に，音楽を中心とした文化芸術に関するプロデューサーの死没でもあったように，西村朗の死没もまた，芸術音楽における創作者のメチエを，広く演奏分野に啓いていく「総合的音楽人」の喪失であったことを強調しておきたい。確かに，近藤譲，野平一郎，優れた識見をもつ作曲家がまだまだ健在ではある。しかしながら，大阪の商店主の息子として育った西村のような親しみやすさで，音楽業界に「作曲」の知見を広げて行ける人の代りはいない。今年以降，我々はその不在の影響を，事あるごとに意識することになるのだろう。

さて，西村も委員長をつとめた日本音楽コンクールの作曲部門においては，本選での演奏審査が行われず，入選曲が後日収録されラジオ放送されるのみ，という異常事態が続いていたが，昨年，演奏審査を再開するというニュースがあった。1，作曲の審査においては,「良い音楽」と判定する各審査員の音楽観も様々となり，審査員が変われば順位が全く逆になる場合もあること。2，書いた譜面が実際に音になるという，実地の経験を踏ませることが，若手作曲家の成長を促す上で極めて重要であること。3，入賞曲のみを音にした場合，審査員がどのような作風をより積極的に評価したのかが明確化されない。たとえば，A，Bという２つの作風からAが選ばれたとき，Aのみが演奏／放送されても，それが，審査員が「BではなくA」に積極的な評価を与えた結果であることを知るのは不可能である。こうした非常な問題を孕んだ実態が改善したことは，一つの慶事であったといえるだろう。

2023年は，５月に，新型コロナウィルスが５類へと移行され，演奏会の実施において特別な措置を取る必要がなくなった。演奏会場での入場制限がかかるような事態は既に解消済であったが，一部の演奏会場では，楽器間の距離や，ステージ上での奏者の動きなどについて，平時にはない禁止事項が残り，これゆえに演奏不可能な作品も僅かながらあった。５類移行で，これらも完全に撤廃された形である。しかしながら，これは世の中からコロナが根絶された，ということではないので，引き続き一定の警戒をもって感染対策を継続していく必要はあるのは勿論である。なお，コロナ流行による音楽関係者の経済損失を補てんするために行われた，AFF（ARTS for the Future !）的な助成は，2023年にも小規模ながら行われたが，間口を広くという方向性は失われた。

2023年は，レコード芸術誌（音楽之友社）が休刊した年としても記憶されるだろう。レコード芸術は1952年に創刊した，日本を代表するクラシック音楽批評誌であるが，作曲に於いても重要な役割を担ってきた。というのも，この雑誌には，クラシック／現代音楽の国内盤CDが制作されたら，それがどのようなものであれ，必ず取り上げ批評が書かれる（帰属ジャンルが判りにくいインディーズレーベルなどの場合，漏れもあったが）という編集方針があった。この完備性ゆえに，日本国内でＣＤをリリースするということが,「必ず」批評の対象となるのみならず，それに付随する情報もまた，データベース的に蓄積されていくことを意味した。これが失われたことの意味は大きい。作曲という行為は，個々の表現者が独立に行っているもので，一つ一つの作品の社会への波及力は小さい。よって，情報を集積し，鳥瞰的な視座からこれらを概観できるデータベースの構築は，作品の普及という観点からも強く要請されるものである。データベースに関連する話題では，2016年分までサントリー芸術財団が作成していた，日本の作曲家の作品表を，日本現代音楽協会が2021年分より後継的に作成し，2023に初めての出版が行われおり，ＣＤについてもレコード芸術の仕事を継ぐメディアの登場が期待される。

例年ご紹介している現代音楽イベントカレンダー（有志が東京近辺の現代音楽関連のイベントを，開催日程順に紹介）では，456件のイベントが紹介されている。主だったイベントでは，毎年５月，東京オペラシティ文化財団の主催で開催されるコンポージアムでは，近藤譲がテーマ作曲家に。近藤の管弦楽作品２作が初演されたオーケストラコンサート(5/25)の他，近藤の個展が２回開催(室内楽5/26，合唱5/30)。近藤が審査員をつとめる武満徹作曲賞は，イギリスのマイケル・ダブリンが１位。唯一の邦人ファイナリスト山邊光二は２位に(5/28)。例年の尾高賞受賞作のお披露目の場でもあるＮＨＫ交響楽団Music Tomorrowでは，前年逝去した一柳慧の作品を，藤倉大作品とともに受賞曲として演奏。直前に予定されていた指揮者の来日が叶わず，杉山洋一が急遽の代打で好演。ミロスラフ・スルンカの新作初演も(6/27)。サントリーホールのサマーフェスティバルは，三輪眞弘がプロデュースするガムランによる公演(8/25-27)と，国際作曲家委嘱シリーズのオルガ・ノイヴィルト公演(8/23, 24, 28)という対照的な二本柱に，サントリー芥川也寸志作曲賞が加わる。桑原ゆうの新作初演と，田中弘基，松本淳一，向井航が賞を競い向井が受賞(8/26)。なお，このサマーフェスティバル中に，フェスティバルとは独立に開催された，湯浅譲二とクセナキス，ヴァレーズを組み合わせた公演も出色であった(8/25)。演奏審査が復活したことを上述した，日本音楽コンクールの作曲部門は室内楽作品がテーマ(非公開本選10/30)，丹羽菜月，前川泉が1位を分け，石川康平が3位に。日本現代音楽協会が主催する現音作曲新人賞は，福井とも子が審査員長をつとめ，魯戴維が受賞。渡邊陸が聴衆賞(12/21)。作曲家の個展としては，70歳を迎えた野平一郎(2/6)，吉松隆(3/11)，80歳を迎えた池辺晋一郎(9/15, 12/26, 12/28)。その他，中野和雄(2/13)，向井航(2/17, 19)，糀場富美子(3/9)，川島素晴(9/5)，事実上の稲森安太己個展であったPhidias Trio(9/13)，今堀拓也(10/1)，若林千春(11/9)，山本和智(11/11)，佐原詩音(12/28)などが開催された。生誕100年を迎えたリゲティの力のこもった特集が続いたのも印象的で，コパチンスカヤが自在なパフォーマンスをみせた都響(3/27, 28)，２日に亘ってリゲティの弦楽四重奏曲２作，ピアノのための練習曲集全曲を聴かせたトッパンホール(5/28, 29)が話題に。生誕90年を迎えた三善晃は，都響の反戦三部作全曲(5/12)，ピアノ作品を集めた(11/10)が開催されている。また，神奈川県立音楽堂の紅葉坂プロジェクト(7/1)，ピリオド演奏を中心に活躍するコントラバス奏者：布施砂丘彦が独自演出で作り上げるステージに現代作品を組み込む(８/12, 13)など，先鋭的な音楽を新たなキュレーションにて提供する場も生まれつつある。